

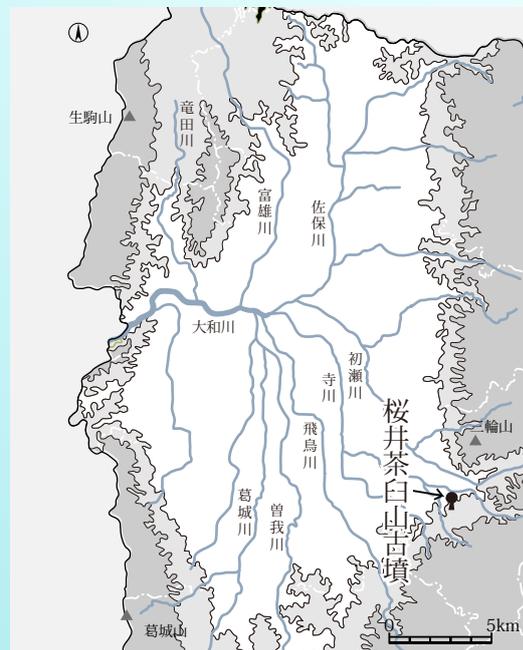
会期 令和元年8月21日～10月31日

桜井茶臼山古墳は、奈良盆地東南端の桜井市外山に所在する、古墳時代前期前半につくられた全長200mの前方後円墳です。1949・50年に発掘調査がおこなわれ、竪穴式石室が完存すること、石室内に木棺が遺存していること、豊かな副葬品をもつことが明らかとなり、1973年に国史跡に指定されました。

第1次の発掘調査から60年が経過した2009年、埋め戻された埋葬施設の詳細を再検討すること、木棺を取り出して保存処理をおこなうことを目的とし、再発掘調査を実施しました。その結果、竪穴式石室、方形壇、丸太垣など埋葬施設の詳細が明らかになりました。竪穴式石室内部は全体に水銀朱が塗布されており、大量の水銀朱が用いられていました。また、300点を超える銅鏡の破片が出土し、81面を超える多数の銅鏡が副葬されていたことも明らかになりました。

石室から取り出した木棺は、埋蔵環境の中で弱った部分を強化するため合成樹脂を利用して保存処理を行いました。保存処理には、ポリエチレングリコール（PEG）を用いて、約2年半をかけて浸透させて、1ヶ月間の乾燥期間を経て展示・公開ができるようになりました。

木棺は長さ約4.89m、最大幅約75cm、最大厚約27cmで、材質はコウヤマキです。木棺中央にある長方形の穴は木棺を作った際のものと考えられますが、その用途は不明です。向かって左側にある不整形な貫通穴は盗掘時にあけられたものとみられ、また中央付近の細くなった部分も盗掘時に切り取られたものです。この木棺は被葬者を安置する棺室部分のみを割り抜く構造の割竹形木棺と考えられます。



奈良盆地における桜井茶臼山古墳の位置



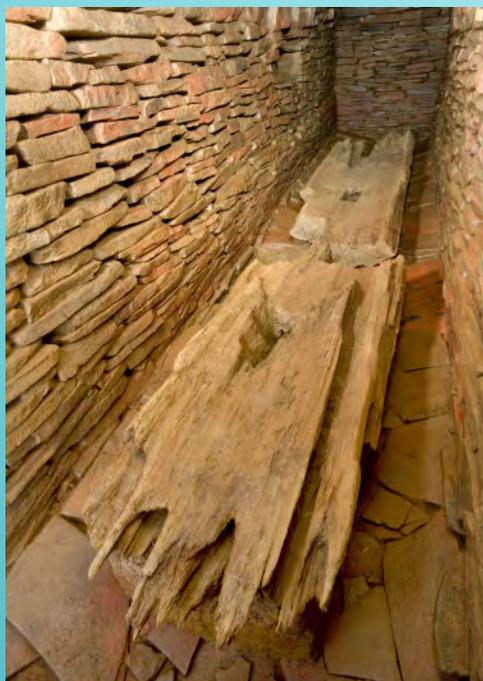
処理溶液に浸した木棺



乾燥中の木棺



竪穴式石室の天井石(南から)



竪穴式石室内の木棺(南から)